

調査報告

## 霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳 — 土浦市王塚古墳の測量調査 —

滝沢 誠

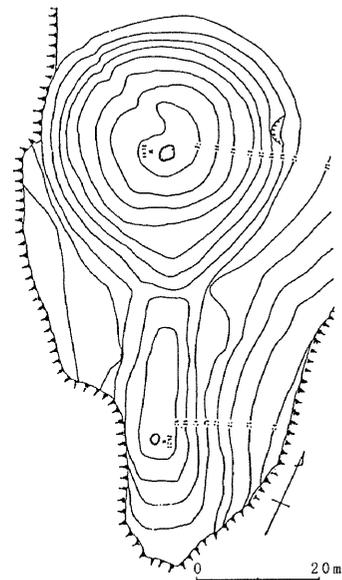
### I. はじめに

茨城県南部に位置する霞ヶ浦（西浦）<sup>1)</sup>は、日本列島第二位の面積をもつ湖として知られているが、今日私たちが目にする姿は、鬼怒川や小貝川の堆積作用に加え、利根川東遷事業や新田開発の結果として近世以降に形づくられたものである。それ以前の歴史を遡れば、縄文海進がピークに達した約6,000年前（縄文時代前期）には、湾口を鹿島灘に開いた内湾（古鬼怒湾）の一部として存在し、その後は海退と陸化の作用を受けながらも、関東平野の東部を占める広大な内海の中心水域として存続しつづけたのである（斎藤・井内・横田1990, 豊田・池田2003）。その内海は、現在の霞ヶ浦の2～3倍にも及ぶ面積を有し、東は北浦、南は現在の利根川低地や印旛沼までも包含する広大な水域であった。

この広大な水域を取り巻く沿岸部には、過去の人間活動によって残された数多くの遺跡が存在する。それらの調査・研究によって浮かび上がるのは、それぞれの入江を中心として内海の利用に適応した特色ある人間集団の営みである。本稿で取り上げる茨城県土浦市王塚古墳もそうした背景をもつ遺跡の一つとみられ、その特徴的な墳丘形態は、内海の水上交通を媒介とした古墳時代前期の首長間関係を解明する有力な手がかりとなりうる可能性がある。しかしながら、同古墳については、1975年刊行の『土浦市史』に簡略な測量図（第1図）が示されているのみで、その細部に関する情報は大幅に不足しているのが現状である。

今回の測量調査は、以上の問題意識をふまえながら、王塚古墳の詳細な墳丘形態や規模を把握することを目的として実施したものである。本稿では、その成果を詳しく報告するとともに、王塚古墳の特徴的な墳丘形態をめぐる問題について若干の考察を試みることにしたい<sup>2)</sup>。

なお、今回の測量調査は、土浦市立博物館の依頼を受けた筑波大学考古学研究室（代表・滝沢 誠）が、土浦市史編さん事業の一環として実施したものである。現地での調査は、筑波大学人文・文化学群人文学類の「考古学実習C」ならびに同大学院人文社会科学研究所歴史・



第1図 王塚古墳の旧測量図  
(1/1,250)

人類学専攻の「先史学・考古学基礎実習」として、2015年12月7日～12月19日の計12日間にもわたって実施した。また、同年12月24日、2017年1月16日・3月21日の計3日間、有志による補足調査を実施した。調査担当者及び調査参加者は以下のとおりである。

調査担当者：滝沢 誠（筑波大学人文社会系・准教授）

常木 晃（筑波大学人文社会系・教授）

調査参加者：辰巳祐樹，ブライ・フリバル・ペトラ，齊木 誠（筑波大学大学院人文社会科学研究科），五十嵐あゆみ，池田 駿，大城陶也，河嶋優輝，霜鳥太一，鈴木周哉，水上輝士，森田なつみ，山本浩太郎，天羽涼花，荒井啓汰，新井 遥，岩澤あゆみ，親泊千明，田中 遼，田邊えり，谷村克眞，中村知誠，山本名織，横山史織，協園大史（筑波大学人文・文化学群人文学類）

## II. 古墳の位置と環境

### 1. 古墳の位置

王塚古墳は、茨城県土浦市手野町に所在する市内最大の前方後円墳である。霞ヶ浦には、出島半島を挟んで北西方向にのびる二つの大きな入江があり、北側を「高浜入り」、南側を「土浦入り」と呼んでいる。このうち、土浦入りの最奥部には筑波山の西側を南流してきた桜川が河口を開き、近世の城下町から発展を遂げた現在の土浦市街地は、その河口域に形成された三角州上に広がっている。王塚古墳は、この土浦市街地中心部から北東方向に向かって約3.3kmの地点に位置する（第3図8）。

地形的にみると、王塚古墳は桜川の東側から土浦入りの北側にかけてつづく新治台地の縁辺部に立地している。その基底部分における標高は22～25m、低地部との比高は16～19mである。さらに微地形に目を向けると、古墳のすぐ南東側には小さな谷が入り込み、北西側約100mの位置にも小さな谷がのびている。これら二つの谷によって挟まれた小台地は、先端幅約200mの扇状を呈しており、王塚古墳はその南東側に突き出した狭小な舌状地形の上部を占有するかたちで築かれている（第2図）。また、その墳丘主軸は、北西から南東の方向にのびる新治台地の縁辺部に沿っており、築造当時は、西側眼下に広がる土浦入り最奥部の一帯から、墳丘長80mを超える前方後円墳の側態を仰ぎ見ることができたと思われる。

こうした立地上の特性は、台地斜面部の自然浸食や台地直下に形成された集落による影響を避けがたいものとしている。現在、寺院の境内地や住宅地が直下に迫った墳丘の西側から南側にかけては急峻な崖となっており、それにより墳丘の一部が崩落して



第2図 王塚古墳と后塚古墳の位置 (1/5,000)



第3図 王塚古墳周辺の古墳時代遺跡 (1/100,000)

1 常名瓢箪塚古墳 2 常名天神山古墳 3 北西原遺跡 4 山川古墳群 5 宝積遺跡 6 東台遺跡 7 東台古墳群 8 王塚古墳 9 后塚古墳 10 ドンドン塚古墳 11 馬坂古墳 12 姫塚遺跡 13 手野宮脇遺跡 14 五斗落遺跡 15 大儘遺跡 16 下郷古墳群 17 田村舟塚古墳群 18 八幡脇遺跡 19 尻替遺跡 20 田宿天神塚古墳 21 赤塚古墳 (網掛けは集落遺跡、黒丸及び黒枠は古墳・古墳群を示す。)

いる。一方、小さな谷に面した墳丘の南東側には緩斜面が広がっているが、住宅地との境界部分は急崖となっている。なお、後で詳しく述べるように、前方部の東側斜面は明らかな改変を被っており、その東側につづく地形も一様に旧状を留めているものとはみなしがたい。

## 2. 周辺の遺跡

### (1) 后塚古墳とその周辺

王塚古墳北西側の平坦地には、同古墳の西側直下に仏堂を構える薬王寺の付属墓地がある。この墓地を挟んで王塚古墳から北方に約 100 m 離れた地点には、后塚古墳が存在する(第2図・第3図9)。この古墳については、1985年に茨城大学考古学研究室による測量調査が行われ、墳丘長 65 m の前方後方墳であるとの認識が示されている(茂木・水野・長洲 1991)。そうした成果に加えて、王塚古墳が前期古墳に特徴的な柄鏡形の墳丘形態をもつことから、土浦入りの最奥部では、古墳時代前期の首長墳としてまず后塚古墳が築かれ、次いで王塚古墳が築かれたとの見方が有力である。

王塚古墳の周辺には、后塚古墳以外に目立った墳丘をもつ古墳は認められないが、小さな谷を挟んで王塚古墳の南東側に広がる台地上には、ドンドン塚古墳(消滅、第3図10)と馬坂古墳(同図11)の存在が知られている(茂木ほか1984)。両古墳については、前者で石棺の発見が伝えられ、後者の周囲で円筒埴輪が採集されていることから、いずれも古墳時代後期の円墳とみられる。また、古墳時代の集落遺跡としては、后塚古墳の東側に姫塚遺跡(同図12)、その北東側に手野宮脇遺跡(同図13)が存在する(茂木ほか1984)。両遺跡からは古墳時代前期の土器が多数採集されており、王塚古墳や后塚古墳との関係が注目される。近隣の遺跡で発掘調査が行われているのは、王塚古墳の北方約 0.5 km に位置する五斗落遺跡(同図14)や大儘遺

跡(同図15)である。これらの遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡がわずかに検出されているものの、その大多数を占めるのは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡である(柴・中根1987)。

## (2) 古墳時代の遺跡群

これまでのところ、王塚古墳の周辺における遺跡の発掘調査は限られており、その実態を十分に把握することはできない。それとは対照的に、王塚古墳が位置する手野町の隣接地区では古墳時代の遺跡が数多く調査されている。

王塚古墳から南東に約1.5～3.0 km離れた土浦市の田村町及び沖宿町では、土地改良事業に伴う大規模な発掘調査が実施され、数多くの古墳時代遺跡が確認されている。そのうち、古墳時代前期の玉作り工房と鍛冶工房が検出された沖宿町の八幡脇遺跡(第3図18)は、関東地方における初期の玉生産や精錬鍛冶の存在を示す、きわめて注目すべき遺跡である(関口ほか2009)。また、この遺跡に程近い尻替遺跡(同図19)でも同様の鍛冶工房が検出されており(小林ほか2007)、両遺跡を残したのは、関東地方の中でもいち早く先進的な手工業生産を開始した人々であったと考えられる。このほか、沖宿町の北西側にあたる田村町では、古墳時代の集落遺跡のほか、中期の前方後方墳(田村舟塚群第2号墳)を含む田村舟塚古墳群(同図17:茂木・塩谷1993)や、後期から終末期にかけての下郷古墳群(同図16:関口・福田・窪田2001)などが調査されている。

王塚古墳の北西約0.5 kmには、新治台地内を貫流する境川によって形成された大きな開析谷が存在する。その北東側に広がる土浦市木田余の台地上では土地区画整理事業に伴う大規模な発掘調査が実施され、計5遺跡で古墳時代の遺構が確認されている。とくに、境川の開析谷に面した宝積遺跡(同図5)と東台遺跡(同図6)では、古墳時代前期の竪穴住居跡が多数検出されるとともに、弥生時代後期の竪穴住居跡も40軒近く検出されている(鍛冶・藤原・石川2002)。これらの遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての中核的な集落がこの地に営まれていたことを物語っている。このほか、古墳時代中・後期の集落や後・終末期の古墳群(東台古墳群:同図7)も確認されており、長期に及ぶ土地利用の実態が明らかとなっている。

## (3) 前期古墳の分布

王塚古墳と同様の規模をもつ前期古墳としては、その西北西約4.2 kmに位置する常名天神山古墳(第3図2)と、南東約7.1 kmに位置する田宿天神塚古墳(同図20)が注目される。

常名天神山古墳は、桜川東岸の台地縁辺部に立地する墳丘長70～75 mの前方後円墳である(茂木・水野・長洲1991)。その低平な前方部の特徴から、古墳時代前期の築造と推定される。また、常名天神山古墳の東側に存在した常名瓢箪塚古墳(消滅, 同図1)も、低平な前方部をもつ墳丘長74 mの前方後円墳であったとされ(茂木ほか1984)、同じく古墳時代前期の年代が推定される。これらの前方後円墳が位置する土浦市常名の台地上では、古墳時代前期の大規模な集落(北西原遺跡・同図3:石川・藤原ほか2004など)や方形周溝墓群(山川古墳群・同図4:小川・大淵・関口2007)などが確認されている。

田宿天神塚古墳(田宿・赤塚第1号墳)は、かすみがうら市加茂に所在する墳丘長63 mの前

方後円墳である。王塚古墳と同様に土浦入りに面した新治台地縁辺部に立地し、1995年に筑波大学による測量調査が行われている(田中・日高1996)。その際、墳丘からは多数の壺形埴輪片が採集されており、同古墳の年代は古墳時代前期末頃に求められる。また、田宿天神塚古墳の東方約0.8 kmの地点には、墳丘長約30 mの前方後円墳とみられる赤塚古墳(同図21)が存在したとされるが、すでに消滅している(茂木1985)。これらの古墳が築かれた加茂東部では、古墳時代前期から後期に及ぶ大規模な遺跡の存在が推定されており、川尻川の開析谷に面した加茂西部でも複数の古墳時代遺跡が確認されている(日高2001)。

#### (4) 遺跡分布の特徴

以上のように、王塚古墳が築かれた新治台地の縁辺部には古墳時代の遺跡が数多く存在する。それらはある程度のまとまりをもって分布しており、先に紹介したものを北側から整理すると、①土浦市常名の遺跡群(常名台遺跡群)、②同市木田余台の遺跡群(木田余台遺跡群)、③同市手野町の遺跡群、④同市田村町の遺跡群、⑤同市沖宿町の遺跡群、⑥かすみがうら市加茂西部の遺跡群、⑦同市加茂東部の遺跡群としておよそ把握することができる。加えて、①と②の間に位置する土浦市真鍋町にも古墳時代の遺跡群が存在する可能性があることから、それらの遺跡群は、概ね1～2 kmの間隔をおいて分布していることがわかる。それらのうち、大規模な発掘調査が実施された①や②などでは、古墳時代前期(あるいは弥生時代後期)からつづく集落の存在が明らかとなっている。一方、王塚古墳が位置する③の状況は判然としないが、古墳時代の各時期にわたる遺物が採集されていることから、ある程度継続的な集落の存在を推定することは可能である。

こうした集落遺跡の分布状況とは異なり、王塚古墳をはじめとする前期古墳は、特定の遺跡群にのみ対応している点に注意される。すなわち、前期古墳は①、③及び⑦にのみ認められ、それぞれに少なくとも2基が築造されている。このような古墳の存在形態からすると、当該期の土浦入り北岸一帯には、それぞれの古墳の造営主体となりうる複数の有力集団が、周囲5 km前後の領域を単位として割拠していた可能性が考えられる。

### Ⅲ. 王塚古墳の測量調査

#### 1. 古墳の現状

現在の王塚古墳は、スギやタケなどの植物によって墳丘全体が覆われている。後円部の西側にはタケが群生し、それ以外の大部分はスギを中心とする山林となっている。今回の調査の直前までは、それらに加えて雑草や雑木が墳丘全体に密生し、どの地点に足を運ぶのにも一歩先に進むのが容易な状況ではなかった。そうした植生環境が、王塚古墳の実態把握を長らく阻んできた大きな要因であると言っても過言ではない。今回の調査にあたっては、地権者の許可を得てそれらの雑草や雑木を全面的に除去することとなったが、その作業には、調査開始後の3日間を要し、その後の調査中も随時除去作業を継続する状態であった。

墳丘の残存状況については、後円部と前方部の西側部分が崖によって崩落している点の特筆される。これは、自然侵蝕や集落の拡張によって台地斜面部が削り取られた結果とみられる。また、後円部と前方部の間が墳丘主軸と直交する方向に切り通されている点も見逃せない。そ

の中心部分は深さ1 m程度に掘り込まれ、まさに後円部と前方部が切り離されたような状況である。なお、この切り通しにつづく平坦面は、後円部の東側をめぐって現在の墓地方向にのびていく道となっている。

墳丘の周囲に目を向けると、後円部の北西側は空地となっており、その先には薬王寺の境内から台地上の付属墓地に至る道がのびている。後円部から10 mほど北側にある薬王寺の付属墓地は、比較的新しい墓地区画によって構成され、その東側から後円部の北側にかけては、雑草が生える程度の広い空地となっている。一方、後円部と前方部の東側は、墳丘からつづくスギ林となっており、墳丘と同様に雑草や雑木が繁茂している。

## 2. 測量調査の成果

### (1) 調査の方法

今回の測量調査では、レーザーレベルによる標高点の観測とトータルステーションによる平面観測を組み合わせた方法を採用し、25 cm毎の等高線を基本として1/100縮尺の原図を作成した。その基準となる標高は、古墳の南西約450 mに位置する一級水準点（標高4.3121 m）を利用し、水準測量によって古墳の北西側にベンチマークを設置した。また、測量の基準点については、後円部頂の中心点（O点）を通る墳丘の想定主軸線上に順次設置したのち、それらの直角方向に適宜増設していく方式を採用した。その後、相互に見通せる基準点を観測し、必要に応じて座標値を調整した。

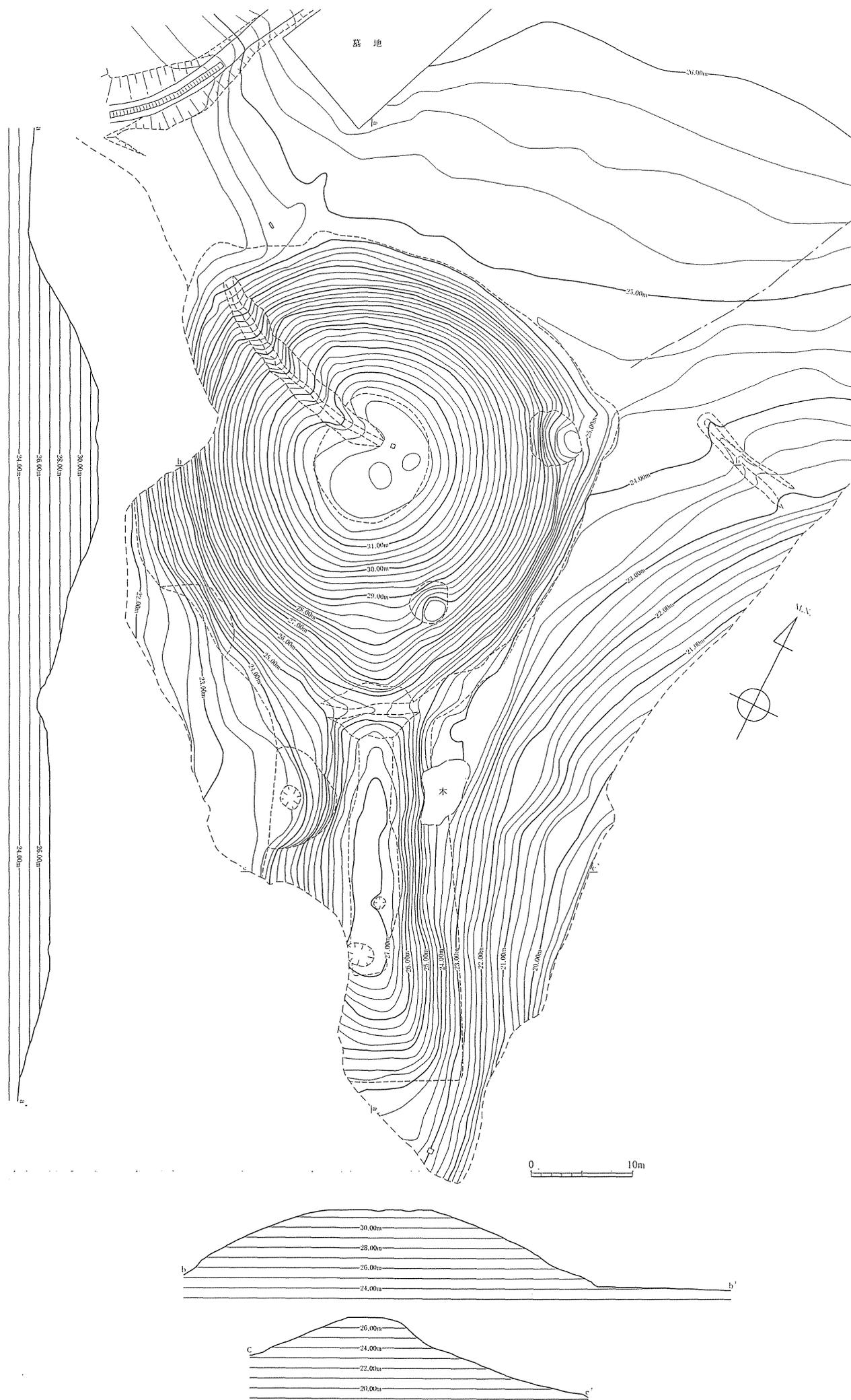
第4図は、以上の方法によって得られた原図をトレースし、最終的に1/500の図に調整したものである。以下、同図にもとづいて、各部の状況を詳しくみていくことにしたい。

### (2) 後円部

後円部の直径は現状で約44 mを測り、その等高線はほぼ同心円状にめぐっている。西側の墳裾部が一部崩落しているものの、全体としてみれば、後円部は本来の形状を比較的よく留めている。なお、前方部側の切り通しは、前方部の高さに相当する部分から掘り込まれているため、後円部の形状を大きく損なうものとはなっていない。

墳頂部には、直径11～12 mの正円形に近い平坦面が認められる。その標高は概ね31.75 mで、やや高い北側の最高点は標高32.011 mである。また、その縁辺部は、標高31.50～31.75 mを境に墳丘斜面へと移行している。平坦面の中心近くには祠があり、それに付随する道によって北西側が溝状に掘り込まれているものの、墳頂部全体が削平されたような形跡は認められない。なお、平坦面の中心付近とその東側には、直径2 m前後の浅い窪みが存在する。

墳丘の斜面はほぼ連続的に傾斜し、明確な段築は認められないが、以下の点からその存在を推定することができる。第一に、前方部側の標高28.00～29.00 mが幅6 m前後の緩斜面を形成し、それよりも下方が前方部側に張り出している点が挙げられる。後述するように、前方部の上面は標高27.00 m付近で平坦面を形成していることから、前方部はそれにつづく斜面<sup>3)</sup>を介して、この部分で後円部に接続しているとみられる。第二に、後円部の斜面を全体としてみた場合、標高28.00 m付近でわずかに傾斜が変化している点が挙げられる。この高さは、先に述べた前方部側緩斜面の高さとほぼ一致している。これらの点を考えあわせると、後円部の中



第4図 王塚古墳測量図 (1/500)

位には段築の存在が予想され、その高さは前方部側緩斜面が始まる標高 28.75 m 付近に求められる。なお、北側や西側の墳裾部では、墳端から高さ約 2 m までに緩やかな傾斜が認められる。現状では推測の域を出ないものの、この部分に最下段の可能性を考慮するならば、後円部は 3 段築成ということになる。

墳裾部については、北西側から北側にかけての残存状況が比較的良好で、標高 24.75 ～ 25.00 m に墳端の傾斜変換が認められる。ただし、そこから東側に向かって墳端は低くなり、南東側からくびれ部にかけては、標高 24.00 m 付近に傾斜の変換が認められる。なお、東側の墳裾部には大きな穴が掘られており、その排出土が下方に流出している。また、その南側につづく墳裾部は急傾斜をなしており、明らかに改変を被っている。一方、西側の未崩落部分では標高 22.50 m 前後に傾斜の変換が認められ、それにつづく西側のくびれ部付近では標高 23.75 m 付近に傾斜の変換が認められる。つまり、後円部西側の墳端を全体としてみると、北 (24.75 m) から西に向かって 2 m 以上低くなったのち、くびれ部に向かって 1 m 以上高くなるという高低差を生じている。これは、後円部西側の自然地形が当初から強く傾斜していたことに起因するものであろう。

### (3) 前方部

前方部は、前端部を含む西側の 1/4 が崖の崩落によって失われている。また、後円部との間は切り通しによって切断され、両側のくびれ部は明瞭さを欠いている。さらに、西側の斜面が大きく削り取られ、東側の斜面が急傾斜となるなど、後円部に比べて変形が著しい。

そうした残存状況の中にあって、前方部の上面は本来の形状に近いものとみられる。その平面形は極端に細長く、見かけ上の幅は後円部側で約 3 m、前端側で約 4 m を測り、長さは 20 m 以上に及んでいる。また、標高は約 27.00 m で、両端を除いてほぼ平坦である。このような上面の状況は、きわめて狭長な前方部の形態をうかがわせるものである。

先述のように、前方部の側面は改変が著しい。ただし、西側の崩落部分と削り取られた部分の間には、幅 4 ～ 9 m にわたって本来の斜面に近いとみられる部分が残存し、その墳端は標高 23.50 m 付近に求められる。一方、東側の側面については、くびれ部から前端部にいたる 2/3 ほどの範囲が削り取られたように急傾斜となっており、改変を被っているのは明らかである。また、残り 1/3 ほどの範囲も急傾斜をなしており、墳端も明確ではないことから、本来の斜面とみるのは困難である。

前方部の前面は、東側の 2/3 程度が残存している。そこでは、標高 27.00 m 付近に上端が認められ、標高 24.00 ～ 24.25 m に下端が求められる。その傾斜は西側斜面に比べて緩やかであるが、すぐ南側に平坦面が存在することから、墳端の位置は比較的明瞭である。一方、上端の位置を西側斜面の傾斜角に合わせて復元すると、現状よりも 2 m ほど南側となる。その位置は、標高 26.25 m の等高線がめぐる付近であり、東側隅角部の残存状況とも整合性が高い。これらのことから、現在の緩やかな斜面は、墳丘の流失によって生じたものと推定される。

なお、以上に述べた前方部の各斜面においては、段築の存在を示すような事実を確認することはできない<sup>9)</sup>。また、後円部を含めた墳丘全体をつうじて、葺石の存在を確認することはできず、所属時期を特定できるような遺物も採集されていない。

(4) 外部施設

墳丘の西側には、後円部から前方部にかけて幅5～7mの緩斜面が認められる。そのさらに西側は急傾斜の崖となっているが、後円部西側に残存する墳端が他の部分よりもかなり低い位置にあることから、築造時にも墳丘近くにまで台地斜面が迫っていたものとみられる。こうした状況から判断する限り、墳丘の西側に周溝の存在を想定することは難しい。

墳丘の東側は台地の斜面が墳丘の間際にまで迫り、周囲の状況把握を困難にしている。この斜面の下方は谷部の道路によって削り取られているが、墳丘に迫る斜面自体も谷側からの侵蝕を受けているとみられる。ただし、狭小な谷部の規模からみて、築造当時の墳丘東側に大きなスペースがあったとは考えにくく、この部分にも周溝の存在を想定することは困難である。

墳丘の北側一帯では、周囲の状況を面的に確認することができる。全体としては、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、部分的にみると、墳丘の北側では北西から南東の方向に、墳丘の北西側では北東から南西の方向に向かう緩斜面となっている。いずれも自然地形を反映したものとみられ、周溝の存在を直接示すような微地形の変化は認められない。

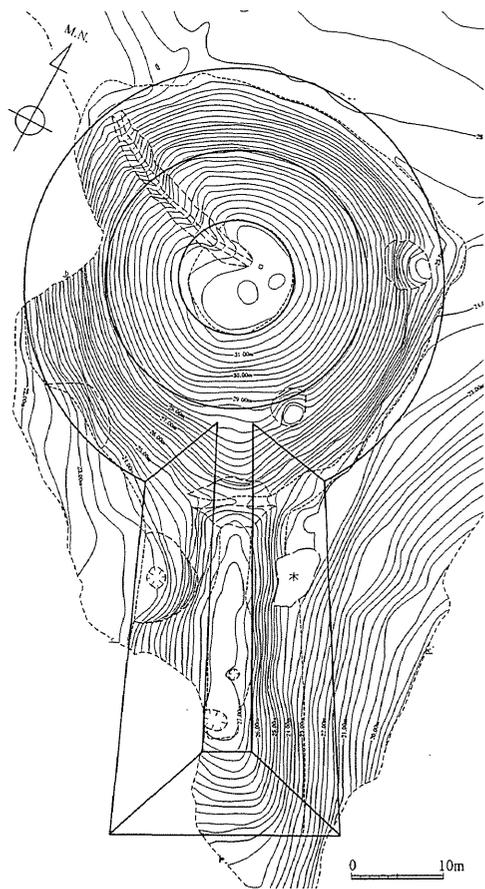
以上の事実から考えると、王塚古墳に周溝が存在するとしても、後円部の北側から北西側にかけてのみではないかと推定される<sup>9)</sup>。一方、それ以外の部分では、自然地形を利用して墳裾部を削り出しているとするのが妥当であろう。

IV. 墳丘形態からみた王塚古墳

1. 墳丘の復元

本節では、今回の調査のまとめとして王塚古墳の墳丘形態を復元し、その系譜や年代を探っておきたい。また、それらをふまえたうえで、王塚古墳が霞ヶ浦沿岸に築かれた背景についても考えてみたい。

第5図は、今回の調査成果をもとに作成した王塚古墳の墳丘復元図である。発掘調査を経たものではないため、細部については多分に検討の余地を残しているが、前節で述べた各部の所見から総合的に判断し、可能な限りの復元を試みたものである。その要点を記しておく、変形が著しい前方部については、前面と西側面の墳端を基準としながら、上部の平坦面が示す方向性を手がかりとして西半分をまず復元し、それを東半分に戻すという方法によって復元を行っている。また、



第5図 王塚古墳復元図 (1/800)

既述のように、前方部前面については現状よりも2 mほど南側に上端を復元する案としている。さらに、後円部の段築については、想定される位置に上段の下端ラインのみを示している。こうした復元によって得られた墳丘各部の計測値は、次のとおりである。

墳丘 長さ約 84 m / 主軸方向（前方部方向）N - 152° - E（磁北基準）

後円部 直径約 45 m / 墳頂部平坦面径 12.5 m / 上段径約 28 m / 高さ（北側）7.0 m・（東側）8.0 m・（西側）9.5 m

前方部 長さ約 39 m / 前端幅約 25 m（復元） / 高さ（西側）3.5 m・（南側）3.0 m

以上の復元によって明らかなように、王塚古墳の墳丘形態は、狭長で低平な前方部をもつ点に最大の特徴が認められる。具体的に述べると、後円部径に対する前方部長の割合は約 87%で、前方部長は墳丘長の半分近くを占めている。また、前方部の幅は狭く、その側縁部はほとんど開かないとみられる。さらに、後円部と前方部の間には約 5 m の高低差がある。これらの特徴は、以前の測量図からもおよそわかるものであるが、今回の測量調査によってより詳細な把握が可能となった点は大きな成果と言えよう。

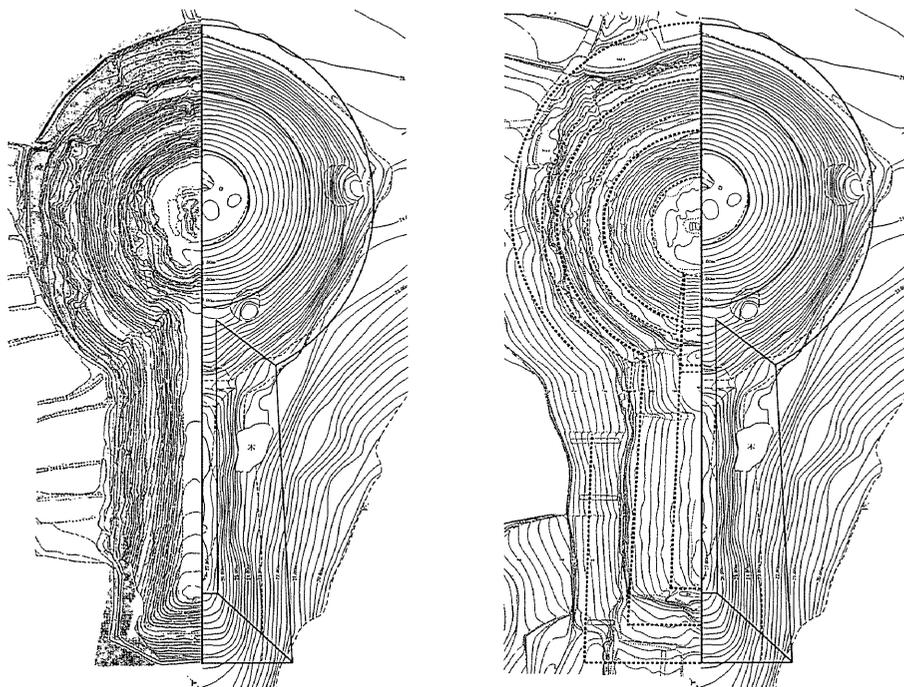
## 2. 系譜と年代

前項で述べた墳丘形態の特徴は、王塚古墳の築造年代を古墳時代前期に位置づけてきた従来の見解を基本的に支持するものである。加えて、近年の研究成果を参照するならば、その系譜や年代についてさらに具体的な議論を進めることが可能である。

前方後円墳の墳丘形態については、これまでに数多くの研究が行われており、とくに上田宏範による築造企画論はよく知られている（上田 1969）。茨城県域では、その上田をはじめとして、茂木雅博や日高慎、塩谷修らが前方後円墳の墳丘形態について検討を加えている（上田 1985、茂木 1988、日高 1998、塩谷 2000 など）。一方、2000 年代以降には、畿内の前期大型前方後円墳に関する研究が進展し、澤田秀実や岸本直文らは、大和東南部において箸墓古墳から変化していく系列と、それとは別に桜井茶臼山古墳から変化していく系列が存在することを詳細に論じている（澤田 2000・2005、岸本 2005・2008 など）。

これらの議論の中で、「桜井茶臼山系列」（澤田 2005）や「副系列」（岸本 2008）とされる畿内の前期大型前方後円墳については、きわめて細長い前方部をもつ点に王塚古墳との共通性がうかがえる。この系列は、大和東南部に順次築かれた、桜井茶臼山古墳（墳丘長約 195 m）、メスリ山古墳（墳丘長約 235 m）、渋谷向山古墳（墳丘長約 300 m）の 3 古墳から構成され、後円部 3 段・前方部 2 段の墳丘構造を共有するなど、箸墓系列（主系列）とは異なる設計原理で築かれたものと考えられている。また、桜井茶臼山古墳については、京都府椿井大塚山古墳（墳丘長約 175 m）や大阪府忍岡古墳（墳丘長約 90 m）との相似関係が指摘されるとともに（岸本 2005）、静岡県寺谷銚子塚古墳（墳丘長約 108 m）や東京都宝来山古墳（推定墳丘長 97.5 m）、茨城県星神社古墳（墳丘長約 100 m）といった東日本諸古墳との相似関係も指摘されている（藤原 2005）。

王塚古墳の墳丘形態をめぐる従来議論では、茂木雅博が上田宏範の分類法による 6 : 3 : 2 の比率となることを指摘している（茂木 1988）。また、塩谷修は、狭長な前方部に着目しながら、「奈良県渋谷向山古墳や宝来山古墳などに規格の系譜が求められる」と述べている（塩谷

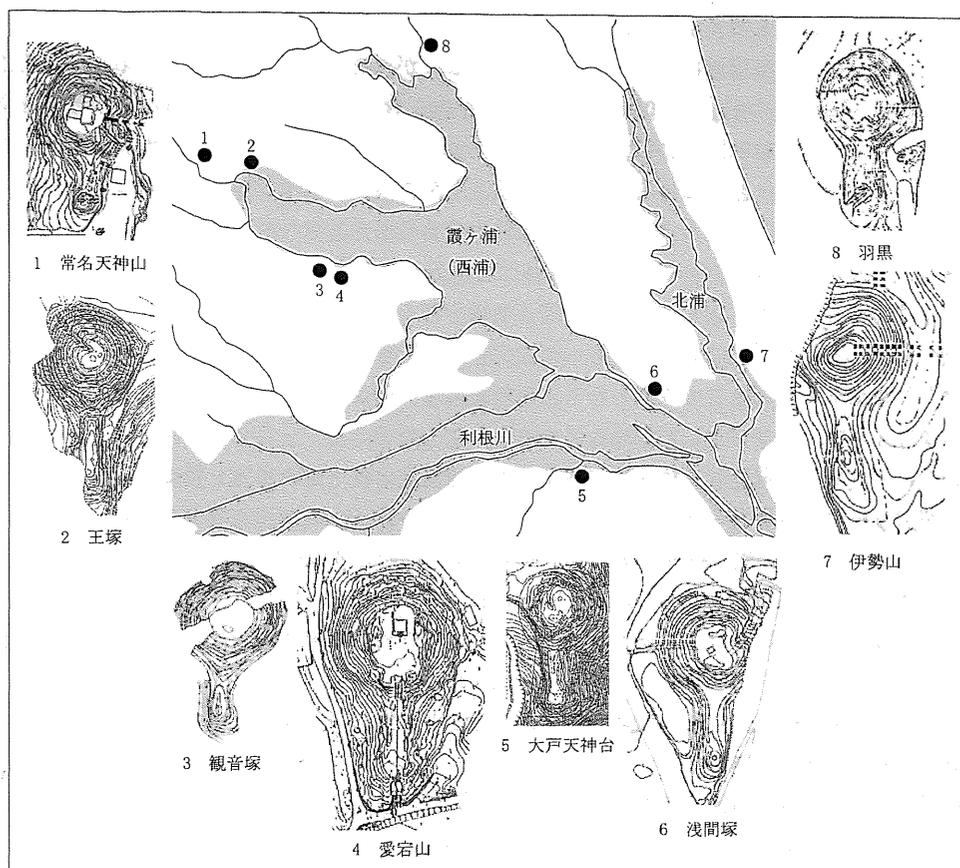


第6図 王塚古墳 (1/1,000) と桜井茶臼山古墳 (左: 1/2, 321)・メスリ山古墳 (右: 1/2, 798)

2000: 125頁)。そうした従来の見方に対し、ここでは近年の研究成果をふまえつつ、王塚古墳の墳丘形態が桜井茶臼山系列の影響下に成立したものである可能性を指摘しておきたい<sup>9)</sup>。王塚古墳の墳丘構造については、後円部が3段となる可能性があり、その上段は前方部から独立しているとみられる。こうした墳丘構造のあり方も、上記の系譜的理解と符合するものであろう。

そこで、桜井茶臼山系列の古墳と王塚古墳のさらなる比較を行うために作成したのが第6図である。桜井茶臼山系列の変遷については、後円部上段の発達(後円部上段斜面長の増加)に加え、前方部側縁の直線化(メスリ山古墳)と前方部幅の拡大(渋谷向山古墳)が指摘されている(澤田2000, 岸本2008など)。ここでは、前方部幅が拡大した段階の渋谷向山古墳を除き、桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳を比較対象としているが、後円部と前方部の構成比など、いずれも平面形態はよく似ている。一方、墳丘の構造に着目すると、王塚古墳の後円部における上段斜面長の比率は、桜井茶臼山古墳よりもメスリ山古墳のそれに近い。

以上のように、王塚古墳の墳丘形態には桜井茶臼山系列との関係がうかがえ、その墳丘構造にはより後出的な要素が認められる。こうした見方に大きな誤りがなければ、従来古墳時代前期後半に位置づけてきた王塚古墳の築造年代についても相応の見直しが必要となる。おそらく王塚古墳の築造年代は古墳時代前期前半にまで遡り、4世紀初頭頃の築造とみられているメスリ山古墳(岸本2008)の年代から大幅に遅れたものとはならないであろう。



第7図 霞ヶ浦沿岸における「王塚タイプ」の前方後円墳

(地図の縮尺は1/500,000, 古墳の縮尺は1/3,000。網掛けは推定される古墳時代の水域を示す。)

### 3. 王塚古墳と霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳

王塚古墳の墳丘形態に対する上記の理解をふまえたうえで、最後に霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳と王塚古墳の関係について述べておきたい。

霞ヶ浦沿岸には、古墳時代前期に築かれたとみられる前方後円墳が点在している。それらのうち、発掘調査が実施されたものはごく一部で、ほとんどは測量調査のみにとどまっている。したがって、限られた情報によらざるをえないが、それらの多くは王塚古墳と同様に幅が狭く直線的な前方部を備えている点が注目される。

第7図は、そうした特徴をもつ前方後円墳の分布を示したものである。具体的にみると、王塚古墳が位置する土浦入りには、美浦村愛宕山古墳(高橋1990)と同観音山古墳(大竹ほか1981)が存在し、桜川下流域の土浦市常名天神山古墳(茂木・水野・長洲1991)も同様の特徴を備えている。また、高浜入りには小美玉市羽黒古墳(早稲田大学考古学研究室1973)、霞ヶ浦南端には潮来市浅間塚古墳(茂木ほか1980)が存在し、北浦東岸には鹿嶋市伊勢山古墳(茂木・片山1975)が認められる。さらに、現在の霞ヶ浦からはやや離れるが、利根川南岸域の香

取市大戸天神台古墳も狭長な前方部を有している(萩原・白井 1999)。

いまこれらについて詳細な検討を加える余裕はないが、前方部の長さに着目すると、後円部径に対する前方部長の割合が90%程度のもと、70%程度のものに大別することが可能である。すなわち、前者には王塚古墳、伊勢山古墳、大戸天神台古墳が該当し、後者には常名天神山古墳、愛宕山古墳、観音山古墳、浅間塚古墳、羽黒古墳が該当する。この両者は、幅が狭く直線的な前方部を備えている点や、後円部上段が前方部から独立している点で共通し、類縁的な関係にあるとみてよいだろう<sup>7)</sup>。その具体的な関係を探る手がかりは乏しいが、先に示した王塚古墳のあらたな年代観を前提とし、壺形埴輪を伴う羽黒古墳の年代が前期後半に求められる点を考慮するならば、前者から後者への変化を想定することも一案である。ここでは、王塚古墳などの築造を契機として成立したとみられる霞ヶ浦沿岸に特徴的な前期前方後円墳の一群を、仮に「王塚タイプ」として把握しておくことにしたい。

ところで、これに関連して注意すべきは、霞ヶ浦沿岸には王塚タイプと異なる墳丘形態をもつ前期前方後円墳も存在するという事実である。かすみがうら市田宿天神塚古墳(田中・日高 1996)と石岡市熊野古墳(田中 1997)は、狭いくびれ部から前端に向かって広がる前方部を有し、王塚タイプの諸古墳とは明らかに区別される。そこで周辺に目を広げると、土浦入りに河口を開く桜川の中流域には、同様の墳丘形態をもつ前期前方後円墳として、つくば市山木古墳(上川名ほか 1972)が認められる。また、さらに北側の小貝川中流域に位置する筑西市灯火山古墳(瀬谷 1990)や、茨城県南部最大の前期古墳である筑西市葦間山古墳(三木 1991)も同様の形態をもつ可能性が高い<sup>8)</sup>。

桜川中流域や小貝川中流域などに築かれたこれらの古墳の墳丘形態がどのような系譜関係を有するのかについては、なお慎重な検討が必要である。とはいえ、その分布域が王塚タイプの分布域と一部で重複しつつも、その北西側に別の分布域を形成している点はきわめて重要である。おそらく、一定の範囲で墳丘形態を共有する前期の前方後円墳は、各小地域を基盤とする有力首長どうしが、より広範囲での結びつきを強化するにいたった姿を物語るものであろう。それは、『常陸国風土記』が伝える国造のクニの範囲と符合するものではないが、一定地域の有力首長どうしを結びつける政治圏が古墳時代前期にすでに形成されていたことを示している<sup>9)</sup>。そうした政治圏の形成にあたり、王塚タイプが築かれた霞ヶ浦沿岸では、広大な内海を利用した水上交通がきわめて大きな役割を果たしていたとみて間違いのないであろう。

## V. おわりに

本稿では、あらたに実施した王塚古墳の測量調査について報告するとともに、その成果にもとづいて同古墳の墳丘形態を復元し、そこから浮かび上がる系譜関係や年代について検討を加えた。さらに、王塚古墳と同様の墳丘形態をもつ前期前方後円墳が霞ヶ浦沿岸を中心に分布していることを指摘し、それらの背後に広大な内海を結びつける水上交通の役割を推定した。

もとより測量調査の成果にもとづく議論には限界を伴うが、王塚古墳が桜井茶白山系列に連なる古墳として築かれ、同古墳と類縁関係にある王塚タイプの古墳が霞ヶ浦沿岸を中心に認められるとすれば、それは東日本の一地域にかかわる問題にとどまらず、当該期のヤマト王権と地方勢力の関係を読み解く重要な手がかりともなろう。

桜井茶臼山系列を構成する桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳については、それらの立地的特性と武器類を中心とした副葬品組成から、東日本に通じる重要ルートを掌握した軍事的性格の強い被葬者が想定されている（岸本 2005・2008）。また、桜井茶臼山古墳と直接的に築造企画を共有する古墳が東海以東の地域に認められることから、同古墳の被葬者はヤマト王権の中核にあって東日本の地方経営にあたった人物であるとの指摘もなされている（藤原 2005）。

先述のように、王塚古墳の墳丘構造には後出的な要素が認められるものの、広く桜井茶臼山系列に連なる古墳の展開としてみてよいならば、王塚古墳の被葬者は、両巨大古墳の被葬者が主導した地方政策に関与した人物であったと考えられる。しかも、霞ヶ浦沿岸には同一系譜の前期前方後円墳（王塚タイプ）が集中していることから、ヤマト王権が同地域をより重視し、在地の有力首長も王権との関係に特定の意識を保持しつづけていたことが想定される。

現状の分布から推察すると、桜井茶臼山系列の東方への展開は、太平洋岸ルートを通じたヤマト王権による地方支配の伸張と関係があり、霞ヶ浦沿岸に分布する王塚タイプは、さらに北方世界へと通じるルートの結節点として広大な内海域の掌握が重視されていたことを示唆するものであろう。また、こうした動きは、王塚古墳に近い八幡脇遺跡において古墳時代前期中葉頃の玉生産や精錬鍛冶の存在が確認されている事実とも無縁ではないとみられ、あらたな段階を迎えたヤマト王権との関係は、政治的あるいは軍事的な側面にとどまらず、先進的な手工業技術の導入という側面をも併せもつものであった可能性が考えられよう。

今回報告した王塚古墳は、以上のような歴史的背景が考えられるきわめて重要な古墳である。その理解をさらに深化させていくためには、先行して築かれたとみられる后塚古墳などの前方後円墳についても詳細な検討を行う必要がある。また、周辺の集落遺跡や生産遺跡との関係についても整理が必要である。いずれも今後の課題としなければならないが、本稿で示した王塚古墳の測量調査成果が今後の研究のあらたな基礎データとなりうるならば、当面の目的は達せられたものと言えよう。

## 謝辞

今回の調査に際しては、地権者である薬王寺（総代・大塚勅男氏）、大塚由夫氏、瀬古澤登氏にご快諾をいただくとともに、手野町区長の小野 豊氏にご協力をいただいた。あらためて厚く御礼を申し上げたい。

現地での調査にあたっては、土浦市教育委員会、土浦市立博物館、上大津公民館にご協力をいただくとともに、下記の方々から有益なご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

石川 功、亀井 翼、木塚久仁子、黒澤春彦、塩谷 修、中澤達也、比毛君男、一木絵理、茂木雅博、谷中 隆（五十音順、敬称略）

なお、本稿の内容には、平成 28 年度科学研究費助成事業・基盤研究（C）「伊豆半島の前期古墳と東日本太平洋岸域の拠点形成に関する基礎的研究」（研究代表者：滝沢 誠、課題番号：16K03151）による研究成果の一部が反映されていることを付記しておきたい。

## 註

1) 本稿では、西浦の範囲を指して狭義の意味で「霞ヶ浦」の名称を用いる。

- 2) 今回の測量調査にあわせて、墳頂部の地中レーダー探査を実施した。その成果については、別途報告の機会を設けることにしたい。
- 3) この斜面は高低差 1.5 m 程度で、前方部上面から後円部上段テラスに至る斜道のような役割を果たしていた可能性がある。
- 4) 後円部と前方部間の切り通しは、その両端において標高 25.00 m 付近まで掘り込まれている。ただし、墳丘自体はそれよりも下方につづいており、切り通しの開削にあたっては、この高さ付近における傾斜の変化（段築？）が意識されていた可能性も考えられる。
- 5) 現状における後円部後端の高さは、前方部前端の高さよりも約 1 m 高い。後円部側にのみ周溝をめぐるすことにより、こうした高低差を調整していた可能性が考えられる。
- 6) かつて上田宏範は常陸における前方後円墳の築造企画を検討し、大洗町に所在する鏡塚古墳が桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳と同型式（6：3：1.5）であることを指摘している（上田 1985）。しかし、その後の発掘調査により、鏡塚古墳（日下ヶ塚古墳）の墳丘はかなりの改変を被っていることが明らかとなり、その墳丘形態は上田の推定と大きく異なるものであることが判明している（蓼沼・三井 2015）。
- 7) 以前にも同様の指摘があり、塩谷修は、王塚古墳と伊勢山古墳の墳丘形態が近似していることや、常名天神山古墳の墳丘形態は王塚古墳のそれを継承したものである可能性に言及している（塩谷 2000）。また、大戸天神台古墳の測量調査報告では、その墳丘形態が対岸に位置する浅間塚古墳や伊勢山古墳と近似していることが指摘されている（萩原・白井 1999）。なお、千葉県内には、大戸天神台古墳と同様の墳丘形態をもつ前方後円墳として、君津市飯籠塚古墳や袖ヶ浦市坂戸神社古墳が存在する（白井 2004）。
- 8) 田中裕と日高慎は、これらの古墳の墳丘形態に共通性があることをいち早く指摘し、その背景に何らかの政治的紐帯があったと想定している（田中・日高 1996）。
- 9) 桜川中流域と小貝川中流域で墳丘形態を共有する前方後円墳の被葬者については、突出した規模をもつ葦間山古墳の被葬者を上位とする政治的な優劣関係を形成していたとみられるが（滝沢 2015：173 頁）、王塚タイプの前方後円墳どうしには決定的な規模の差が認められない。同様の政治圏を形成しながらも、有力首長どうしの結合形態に差異が想定されることの意味については、今後検討を進めていく必要がある。

#### 参考文献

- 石川 功・藤原 均ほか 2004 『北西原遺跡（第 1 次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集 土浦市教育委員会。
- 上田宏範 1969 『前方後円墳』学生社。
- 1985 「前方後円墳における築造企画の展開 その五一型式分類からみた常陸の前方後円墳」末永先生米壽記念会編『末永先生米壽記念献呈論文集 乾』末永先生米壽記念会 281-307 頁。
- 大竹房雄ほか 1981 『塚原古墳群第 1 号墳（観音山古墳）調査報告書』美浦村教育委員会。
- 小川和博・大淵淳志・関口 満 2007 『山川古墳群（第 3 次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集 土浦市教育委員会。
- 鍛冶文博・藤原 均・石川 功 2002 『木田余台Ⅱ』木田余土地区画整理組合・土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会。
- 上川名昭ほか 1972 『茨城県筑波町山木古墳』茨城県考古学会。

霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳

- 岸本直文 1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号 45-63頁。
- 2005 「桜井茶白山古墳の歴史的位置」岸本直文・澤田秀実編『桜井茶白山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第2冊 大阪市立大学日本史研究室 115-128頁。
- 2008 「メスリ山古墳と政祭分権王政」岸本直文・所 梓編『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第3冊 大阪市立大学日本史研究室 145-164頁。
- 小林孝秀ほか 2007 『尻替遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 土浦市教育委員会。
- 斎藤文紀・井内美郎・横田節哉 1990 「霞ヶ浦の地史：海水準変動に影響された沿岸湖沼環境変遷史」『地質学論集』第36号 103-118頁。
- 澤田秀実 2000 「墳丘形態からみた美作諸古墳の編年的位置づけ」倉林真砂斗・澤田秀実編『美作の首長墳—墳丘測量調査報告—』吉備人出版 95-120頁。
- 2005 「桜井茶白山古墳築造企画の成立過程」岸本直文・澤田秀実編『桜井茶白山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第2冊 大阪市立大学日本史研究室 43-56頁。
- 三木ますみ 1991 「葦間山古墳」西野 元編『古墳測量調査報告書Ⅰ』筑波大学歴史・人類学系 12-17頁。
- 塩谷 修 2000 「霞ヶ浦沿岸の前方後円墳と築造規格」茂木雅博・木崎 悠編『常陸の前方後円墳(1)』茨城大学人文学部考古学研究室 116-136頁。
- 塩谷 修・茂木雅博 1993 「土浦市舟塚2号墳(D-59)の調査」『博古研究』第5号 56-69頁。
- 柴 正・中根節男 1987 『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告書第43集 茨城県教育財団。
- 白井久美子 2004 「前方後円墳」財団法人千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』資料編考古4 千葉県 628-641頁。
- 関口 満・福田礼子・窪田恵一 2001 『下郷遺跡・下郷古墳群』佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 土浦市教育委員会。
- 関口 満ほか 2009 『八幡脇遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 土浦市教育委員会。
- 瀬谷昌良 1990 『灯火山古墳確認調査報告書』明野町教育委員会。
- 高橋嘉朗 1990 「美浦村の古墳と古墳群」『美浦村史研究』第6号 美浦村史編さん委員会 27-46頁。
- 滝沢 誠 2015 『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社。
- 蓼沼香未由・三井 猛 2015 『茨城県東茨城郡大洗町日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳 平成22年度測量調査・平成24年度範囲確認調査概要報告書』大洗町文化財調査報告書第18集 大洗町教育委員会。
- 田中 裕 1997 「茨城県千代田町熊野古墳の測量調査」筑波大学先史学・考古学研究』第8号 107-118頁。
- 田中 裕・日高 慎 1996 「茨城県出島村田宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第7号 83-106頁。
- 筑波大学考古学研究室編 2001 『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書—遺跡地図編—』霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室。
- 土浦市史編さん委員会編 1975 『土浦市史』土浦市。
- 豊田麻衣・池田 宏 2003 「霞ヶ浦湖岸平野の形成過程」『筑波大学陸域環境研究センター報告』No.4 61-73頁。

- 西宮一男 1969 『常陸狐塚古墳』岩瀬町.
- 萩原恭一・白井久美子 1999 「佐原市大戸天神台古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第7号 千葉県 159-168頁.
- 比毛君男ほか 2004 『北西原遺跡(第3次・第4次調査)・山川古墳群(第1次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 土浦市教育委員会.
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」第3回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会編『〈シンポジウム〉前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会 105-122頁.
- 2001 「古墳時代」『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書-遺跡地図編-』霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室 46-59頁.
- 藤原知広 2005 「桜井茶臼山古墳の類型墳」岸本直文・澤田秀実編『桜井茶臼山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究所報告第2冊 大阪市立大学日本史研究室 65-76頁.
- 茂木雅博 1988 「常陸の初期前方後円墳」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』下巻 吉川弘文館 25-52頁.
- 茂木雅博・片山 洋 1975 「常陸伊勢山古墳の墳形について」『古代学研究』第76号 20-23頁.
- 茂木雅博ほか 1980 『常陸観音寺山古墳群の研究』茨城大学人文学部史学第5研究室.
- 1984 『土浦の遺跡-埋蔵文化財包蔵地-』土浦市教育委員会.
- 茂木雅博・水野佳代子・長洲順子 1991 「土浦市における古墳の測量」『博古研究』創刊号 49-60頁. 早稲田大学考古学研究室 1973 「常陸における古墳の測量調査」『古代』第56号、34-39頁.

#### 挿図出典

- 第1図 土浦市史編さん委員会編1975。一部改変。
- 第2図 土浦市都市計画図をもとに筆者作成。
- 第3図 茂木ほか1984及び筑波大学考古学研究室編2001に掲載された各遺跡の情報を利用し、国土地理院2万5千分の1地形図をもとに筆者作成。
- 第4図 筆者作成。
- 第5図 筆者作成。
- 第6図 岸本・澤田編2005及び岸本・澤田編2008をもとに筆者作成。
- 第7図 各古墳の報告書掲載図をもとに筆者作成。